

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2013年 2月 21日

派遣者氏名（専門分野）	内藤 貴夫 （ 比較文学 ）
-------------	----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	エドワード・ブルワー＝リットンのヴィクトリア時代における評価とその受容の変化について
-------	--

派遣期間

2012年 8月 30日 ～ 2012年 9月 14日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	イギリス	ロンドン	大英図書館	
	イギリス	ロンドン	英国立芸術図書館	
	イギリス	ハートフォード	ネブワース・ハウス	

派遣先で実施した研究内容

派遣者は、ヴィクトリア時代の作家エドワード・ブルワー＝リットン（Edward Bulwer-Lytton, 1803-73）を研究しており、本派遣ではこれまで研究されていないリットンの当時の評価とその変移に注目した。

そこで派遣者はイギリスの大英図書館および英国立芸術図書館を訪問し、当該時期の雑誌におけるリットンの批評を調査した。また比較文学の観点から、坪内逍遙へ影響を与えたとされるリットンの小説論「小説における芸術」についても分析を行った。限られた時間の中であったが、十数種類の雑誌の中から有益な記事を実見・収集することができ、当初の派遣目的は達成できたと考えられる。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究の目的は、第一に、エドワード・ブルワー＝リットンの小説が当時イギリスでどのように評価されたのかを当時の雑誌を中心に調査し、リットンの隆盛とその後訪れる衰退の原因を探ること、そして第二に、坪内逍遙へ影響を与えたとされるリットンの小説論「小説における芸術」（“Art in Fiction”, 1838）の、イギリスにおける当時の反響とその位置づけを当時の雑誌から分析することであった。

（1）リットンの批評について

先行研究では触れられていないが、非常に早い時期からリットンを評価する記事が掲載されており、その数は時とともに増加していることが確認できた。1828年に発表された第二作目の『ペラム』（*Pelham*）は、『ニュー・マンズリー・マガジン』（*New Monthly Magazine*）において「現代で最も成功した小説の一つ」と評されており、早くも1834年には『アメリカン・クォーターリー・レビュー』（*American Quarterly Review*）において、「（リットンは）疑いもなく、現在最も人気のある作家」と評されている。1875年の『ニュー・マンズリー・マガジン』でも、リットンはディケンズ、サッカレーと並ぶヴィクトリア朝の代表的作家として評されており、彼が長期にわたり人気を博していた事実が確認できた。

一方でリットンに否定的な記事を書ける雑誌も存在し、『エディンバラ・レビュー』（*Edinburgh Review*）や『クォーターリー・レビュー』（*Quarterly Review*）、『フレイザーズ・マガジン』（*Fraser's Magazine*）が代表的なものとして挙げられる。しかしこれらの雑誌は、建前としてはリットンの小説の不道徳性を批判し

ているが、その裏にはリットンに対する個人的な嫌悪や羨望が関連していることが判明した。例えば『フレイザーズ・マガジン』は、『ポール・クリフォード』においてリットンがスコットランド人を批判したことからスコットランド人の編集長ウィリアム・マギンが激怒し、寄稿者のサッカーらを巻き込んでリットンに対する批判を行うようになっていく。サッカーは晩年にリットンに謝罪文を送り、嫉妬心による愚行であったと告白している。また、『エディンバラ・レビュー』や『クォーターリー・レビュー』の悪質な批判に対して、リットンは批評のあり方についての評論を『ニュー・マンズリー・マガジン』に寄稿している。これらのことから、批評家の評価と世間一般の評価にズレが存在していることを発見できた。

リットンの人気の衰退については、レズリー・ミッチェル氏が指摘しているように、読者の趣向の変化、つまり簡潔明快な物語が好まれる中で、リットン独特の主題や難解な表現などが敬遠されるようになったのである。しかし、本派遣での調査結果を踏まえると、ミッチェル氏の分析に加えて、リットンが批評家を味方につけなかったという点も彼の人気の衰亡に関連している可能性も考えられる。実際に、ディケンズの小説は不道德性によって一時はリットン同様に批判されながらも、後に批評家を味方につけ、現在でも人気を保持している。リットンの場合は批評家の支持を得なかったことによって、読者がリットンの作品に関心を寄せる機会が減少したと考えられるのである。

## (2) 小説論「小説における芸術」について

「小説における芸術」は、リットンが1838年に創刊した雑誌『マンズリー・クロニクル』(*Monthly Chronicle*)の創刊号に掲載した小説論であるが、この中でリットンは、小説の主眼が人間の情念の描写にあることを説き、小説の芸術性を主張している。それだけではなく、本派遣調査によって、この小説論が当時の主流であったウォルター・スコットの作風と相反するものであることが分かった。リットンの息子ロバートの回憶によればリットンは観察眼に優れ、周囲の改善すべき点を細かく記していたという。おそらくこの小説論もその一つであり、小説の改革を試みたリットンの姿勢が窺える。

また当時の評論を調査した結果、このような主張は他に類を見ず、非常に特異なものであったことが予想される。残念ながらこの小説論の評価や反響は確認できなかったが、リットンが小説家としての地位を確立していたことを考慮すると、大きな影響があったと考えられる。日本では、リットンの先行研究として、松村昌家氏が『文豪たちの情と性へのまなざし』(ミネルヴァ書房、2011)において、逍遙の『小説神髓』がリットンの「小説における芸術」を参照して構成されている旨を指摘しているが、「小説における芸術」の特異性を強調することで、この指摘がより説得力のあるものになるであろう。イギリスにおいて奇抜であったリットンの小説論は、日本においてもやはり斬新で、新たな小説の方向性を模索していた逍遙が大いなる衝撃を受けてこれを取り入れたとしても不思議ではないであろう。

以上のように、当該時期の雑誌の調査によって、リットンが非常に早い時期から評価され、長期にわたり大人気を博していたことが確認でき、その人気の衰退については、批評家を味方にしなかったという新たな要因を考察することができた。また、彼の小説論の特異性を発見し、坪内逍遙の『小説神髓』との関連についても予備調査を補完することができた。

## 派遣後の研究発表の予定

派遣者は、本派遣で得た知見をもとに、以下の1本の研究報告を行い、さらに1本の研究報告を予定している。

- ・2012年11月17日：日本比較文学学会第48回関西大会（於立命館大学）にて報告
- ・2013年11月1-3日：Pacific Ancient and Modern Language Association, 111<sup>th</sup> Annual Meeting (California)にて報告予定

また研究報告をもとに論文をまとめて投稿したいと考える。